

42131

教科書文庫

4
810
42-1929
20000 71944

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

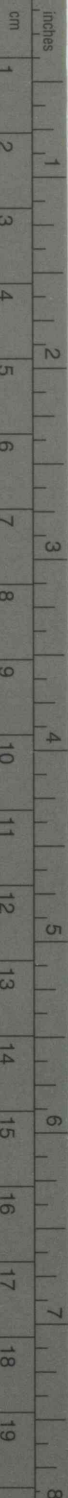


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

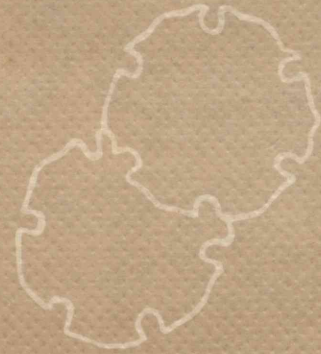


4b
810
大13

高等女
学校用

國語讀本

修正版
第八卷



文韻省檢定濟

元元堂書房編輯所編纂

高等女
學校用
國語讀本

東京 元元堂書房



高等女
學校用
國語讀本
第八
目次

一	皇太后宮を悼み奉る……………	星野 恆……………
二	禁庭の野分(昭憲皇太后御作)……………	……………
三	紅葉の山……………	平家物語……………
四	月の洞庭湖(口語文)……………	佐々木信綱……………
五	小品三章……………	……………
	芳宜園にて曇る夜の月を見る……………	村田春海……………
	砧を聞く……………	清水濱臣……………
	述懐……………	本居宣長……………
六	曉の誕生(新體詩)……………	島崎藤村……………

七 家庭……………加藤咄堂…二五

八 賢母の教訓……………(太平記)…三

九 如意輪堂……………(太平記)…三

一〇 秋の力……………綱島梁川…四

一一 歌話二則……………(古今著聞集)…四

一二 栗栖野……………兼好法師…四

一三 四時のあはれ……………兼好法師…五

一四 梅一輪(俳句)……………五

一五 雪前雪後……………幸田露伴…五

一六 駒ごめて(短歌)……………六

一七 小野の宮(箏曲)……………(箏曲集)…六

一八 順禮唄……………近松半二…六

一九 小枝の笛……………(平家物語)…七

二〇 三條小宰相どのへ(書牘文)……………烏丸光廣…七

二一 獅子が城その一……………近松門左衛門…七

二二 獅子が城その二……………近松門左衛門…七

二三 朗詠五章……………(和漢朗詠集)…七

二四 詩人菅公……………高山樗牛…八

二五 落花の雪……………(太平記)…八

二六 平安京……………藤岡作太郎…二六

二七 國のしづめ(短歌長歌)……………三三

高等女
校用
國語讀本 卷八 目次終

高等女
校用
國語讀本 卷八

一 皇太后宮を悼み奉る 星野 恆

あはれ明治天皇の御事ましくて追慕の涙未だ乾かざるに、今又皇太后宮の登遐を承りて、惶愕の心擣くが如し。臣民忽ち依恃を失ひ、天地重ねて諒闇に入る。嗚呼哀しい哉。恭しく惟るに、皇太后宮徳を桃花殿に毓ひて位を長秋宮に正し給ひ、明治天皇登極の初、日本帝國維新の際、聖業を九重の深きに翊けて仁風を四海の廣きに敷き給ひ、六千餘萬の衆庶皆日月の光を齊へたるを仰ぎ、四十五

*東京帝國大學文科大學教授。
文學博士。
(一九一九—一九二〇)

明治二十四年先帝吳・佐保の兩御守府へ行幸の御時に皇太后の御作に日よりにまつ御船の中やいかならん霧立ちわたる荒海の上に。明治三十七年二月六日夜、葉山御用邸にて、葉山本龍馬が戦勝疑なき由恭しく言上せりと夢み給へるを指す。嵯峨天皇の后、橘嘉智子。學館院を立て、同族の子弟を教へ給ふ。〔圖一五二〇〕聖武天皇の皇后光明子の尊號。悲田院・施藥院を置きて、飢者・病者を療養し給ふ。〔圖一五二一〕

年の歲月長く雨露の恵に浴するを喜べり。あはれ皇太后宮深仁叡徳、田野の農民を憫ませ給ひては野分の風に稲葉の亂れを歎かせ給ひ、出征の將士を思ひやらせ給ひては大宮の中にも霜ふむ軍人の勞苦を體せさせ給へり。或はかしこき御巡幸の後を守らせ給ひて、霧立ちわたる荒海の上に御心を摧き、亡き功臣の跡を偲ばせ給ひて、鳥羽玉の夜の御夢にさへ見そなはし給へり。女學校を興し教育を奨めて屢、其の庭に臨ませ給へるは、檀林皇后の懿績にも超え、病者を勞り、貧民を恵み、災厄に罹れる者を郵み給へるは、仁正皇太后の慈範にも勝り給ふ。後への政の御暇には敷島の道を樂しみ千鳥の跡をも尋ねさせ

*駿河國沼津町の東、御用邸のある處。

給ひて、德音萬首の上に出で、彛訓百世の後に垂る。眞に是婦道の儀刑にして内教の精粹なり。いづれの國の國母にか又斯る辱き大御心はおはしますべき。あはれ明治天皇崩御の後御哀傷は極りなかるべけれども、今上天皇踐祚ましく御孝養至らぬくまなければ、上下皆寶算の窮りなからんことを祈り、内外齊しく慈光の愈、遠からんことを冀ひ奉りしに、富士山の煙久しく絶えて靈藥復得べからず、靜浦の波二たび返らずして仙駕遂に停むるに由なし。臣等世々の史籍を繙き、古を稽へ今を察するにも、坤徳の雙びなくましますを慕ひまつれり。いかでか天を仰ぎ地に伏して、聖壽の延べ難きを悲しまざら

ん。乃ち恭しく丹誠を布きて以て慟地の深哀を擧げ、蕪辭を捧げて以て在天の慈鑒を仰ぎ奉る。

史學會評議員長 文學博士 星野 恆

二 禁庭の野分 (昭憲皇太后御作)

朝露のひるまは、さしもなかりし空の、俄かにかきくもり、夕つつの光も見えず。とかくする程に、雨いたく降り出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。ねやに入る頃は、なほ雨の音のみ聞えしを、夜ふかくなるまゝに、雷さへなりはたゝきて、夢うつゝとも思ひ定めぬに、稻妻のきらめきわたる、いとけうとし。 曉方

明治十一年八月、
明治天皇東山、
北陸兩道御巡幸、
十一月還御あら
せらる。

英照皇太后。

には、雨はをやみぬれど、風は烈しう吹き出でつゝ、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。上には畏くも民のためとて遠きさかひにいでましたるほどなれば、いかなる行宮にましくて、この風の音に御心を悩ましたまふらん。

皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやしたまふらんと思ひつゞくるほどに、夜もあけぬれど、未だ風しづまらで、いづこもおろしこめたる、いとものむづかし。

軒近き栗の枝の結べる實ながら吹き折らるゝ音いとはげしく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れ伏し

*
風神の名。

ぬ。今を盛りなりし眞萩も名残なく散り亂れたる、いと
さびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、まして、あや
しげなる賤が家居などは、たふれたるも多からんなど思
ひやれば、すゞろにかなし。
おしなべて、みのりよしと聞きたる千町田の稻も、吹きそ
こなはれつらんやなど思ひつゝ、
國の科戸の神を心して、
稻葉此上はよたて吹かふん。
なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなく静まり
て、雲間の日影まばゆくさし出でぬるに、おのづから人の
心もおちるにけり。

三 紅葉の山

(一) 醍醐天皇。
(二) 村上天皇。

高倉の院御在位の御時、人の従ひつきたてまつることは、
恐らくは延喜天曆の帝と申すとも、これにはいかで勝ら
せたまふべきとぞ人申しける。大方賢王の名をあげ、仁
徳の行を施させおはしますことも、君御成人の後清濁を
わかたせたまひての上の御事にてこそあるに、むげにこ
の君は、いまだ幼主の御時より性を柔和に受けさせおは
します。
去んぬる承安のころほひは、御年十歳ばかりにやならせ
おはしましけん。あまりに紅葉を愛せさせたまひて、北

(三) 八十二(八)。
(四) 朔平門なる縫殿
陣。

*
とのもりのとも
のみやつこ、心
あらばこの春ば
かり朝ぎよめす
な。(拾遺集)

の陣に小山を築かせ、櫓・楓の誠に色をうつくしうもみち
たるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて終日に観覧あるに、
なほ飽き足らせたまはず。然るを、ある夜、野分はしたな
う吹きて、紅葉みな吹きちらし、落葉すこぶる狼藉なり。
殿守の伴のみやつこ、朝ぎよめすとて、これを悉く掃き捨
て、けり。残れる枝、散れる木の葉をば掻きあつめて、風
すさまじかりける朝なれば、縫殿陣にて酒を煖めてたべ
ける薪木にこそしてけれ。奉行の藏人、行幸より先にと
いそぎ行きて見るに、跡かたなし。如何にと問へば、しか
じかと答ふ。「あな、あさまし、さしも君の執し思しめされ
つる紅葉をかやうにしつることよ。知らず、汝等禁獄流

林間の酒の徳の紅
葉の石の上の題の詩の拂の
線の昔の。(白氏集)

〇八五〇

罪にも及び、わが身もいかなる逆鱗にか預らんずらんと、
思はじ事なう案じつゝけて居たりけるところに、主上い
とゞしく夜のおとゞを出でさせもあへず、かしこへ行幸
なりて、紅葉を観覧あるに、なかりければ、いかにと御尋ね
ありけり。藏人何と奏すべき旨もなし。ありのまゝに
奏聞す。天機殊に御心よげにうち笑ませたまひて、林間
に酒を煖めて紅葉を焼く。』といふ詩の心をば、さればそれ
らには誰れが教へけるぞや。やさしうも仕りたるもの
かな。』とて、却りて観感にあづかりし上は、敢て勅勸なかり
けり。

又安元のころほひ、御方違の行幸のありしに、さらでだに

古昔、宮禁にて夜明を知らずることなかりし人。

鶏人曉を唱ふる聲明王の眠を驚かすほどにもなりしかば、いつも御寢覺がちにて、つやく御寢もならざりけり。いはんや、さゆる霜夜の烈しきには、延喜の聖代、國土の民どもがいかにかに寒かるらんとて、夜の御殿にして御衣を脱がせたまひけることなどまでも思し召し出でて、わが帝徳の至らぬ事をぞ御嘆きありける。や、深更に及びて、程遠く人のさけぶ聲しけり。供奉の人々は聞きもつけられず。主上はきこしめして、只今さけぶは何者ぞ、あれ見てまわれ。と仰せければ、上臥したる殿上人、上臣の者に仰せて尋ねれば、ある辻にあやしみの女の童、長持の蓋さげたるが泣くにてぞありける。いかにと問へば、主の女房

樂中を警備する龍口の當直の者。

* 帝堯陶唐氏。支那古代の聖主。

の院の御所に候はせたまふが、この程やうくにして仕立てられつる衣を持ちて參る程に、唯今男の二三人まうで来て、奪ひ取りてまかりぬるぞや。今は御裝束があれはこそ御所にも候はせたまはめ、又はかたくしくたち宿らせたまふべき親しき御方もまします。これを思ひつゝくるに泣くなり。とぞいひける。さてかの女の童を具してまゐり、この由奏聞したりければ、主上きこしめして、あな、むざん。何者のしわざにてかあるらん。とて、龍顔より御涙を流させたまふぞかたじけなき。堯の代の民は堯の心のすなほなるを以て皆すなほなり。今の世の民は朕が心を以て心とする故に、かたましき者朝にあり

*平清盛の二女徳子。高倉天皇の后。
(八二七—八七五)

て罪を犯す。これ朕が恥にあらずや。」とぞ仰せける。「さ
るにても、取られつらん衣は何色ぞ。」と仰せければ、「しかじ
かの色。」と奏す。建禮門院、その時は未だ中宮にて渡らせ
たまふ時なり。その御方へ、「さやうの色したる御衣や候
ふ。」と御尋ねありければ、先のより遙かに色美しきが参り
たるを、件の女の童にぞ賜はせける。「未だ夜深し。又さ
る目にも遣はん。」とて、上日の者を數多つけて、主の女房の
局まで送らせまし／＼けるぞかたじけなき。さればあ
やしの賤の男、賤の女に至るまで、唯この君の千秋萬歳の
寶算をぞ祈りたてまつる。(平家物語)

歌人。

東京帝國大學

文學部講師。

文學博士。

(一九三二)

支那湖南省にあ

り。支那第一の

大湖。

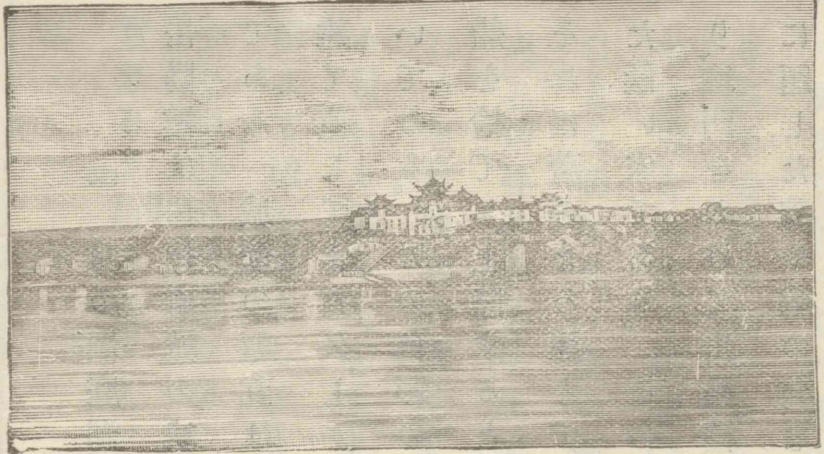
湖南省岳州府。

四月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓
である。城壁の甃瓦は幾百年の風霜に黒ずんでゐる。
建て直してまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝
いてゐる。この色彩の配合が極めて美觀である。
船を捨て、上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。
それは蘆のまろ屋とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺い
た低い家である。その間を通りぬけて、高い石段をあが
り、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。案内の僧に導かれ、壁
に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。

*名は仲淹、宋代の名儒。その居る樓記は世に名高し。
C. 21-111111



かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り、世は遷つても、天然の景には變遷はない。唯見る、浩浩湯々、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげて居る。湖の門戸には彼の堯の女湘君が居たといい、君山が右に、扁山が左に、いづれも江の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子狛犬の如くである。其の

眞中に今や夕日は落ちようとしてゐる。天地の大觀に見とれて覺えず吾を忘れて居たが、やがて促し立てられて船へ還つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈、洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二島の間落ちて、見る／＼紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月は昇る。「洞庭八百里、月照岳陽城」といふ詩の通りである。日を數ふれば十二月三日、恰も舊曆十月十五日の夜であつた。望月の夜、月の名所たる洞庭を過ぎるとは、何といふ好因縁であらう。夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、晝にも寫

岳陽樓記中の句。

し難い麗しい中を、遙かに一帆又一帆、風のまに／＼、遠く、
 近く、且顯はれ、且消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかう
 いふ風景の中に包まれながら湖の底深く沈んだならば
 と思はれる。
 美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月
 は愈澄み上る。見えるものは唯黄金・白銀の波。『皓*月千
 里、浮光躍金』といふ有様である。
 月は良く、風は追手。船は帆腹飽満、一瞬千里の勢で進む。
 夜はふける。月は愈澄む。此の意人の識るなし、いひし
 らぬ樂しき寂しき、何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が
 身そゞろに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖と

に對して居た。一昨年の初秋、富士に登つて絶頂に見た
 七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あは
 れは同じあはれて、風月の縁に富むことを天に謝したこ
 とであつた。(帝國文學)

五 小品三章

八月十五夜芳宜園にて曇る
 夜の月を見る

村田春海

芳宜園の月のまとは年ごろのちぎりなれば、來てふに
 も似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々詣で來にけり。
 さるは降りくらしたる雨の名残、霽れゆかん空も覺えず、

加藤千蔭の家號。
 國學者。
 江戸の人。
 (二四四—二四七)
 月夜よし夜よし
 と人に告げやら
 ば、來てふに似
 たり、待たずし
 もあらず。(古今集)



村田春海像

ましてさやけき光待ち出でんはいと心もとなきを、更け
 ゆかば、かくのみにはあらじを、
 今宵は寢で明してまし。などい
 ひつゝ、伊豫簾空しうかゞけて、
 空のみ打守らるゝもいとわり
 なしや。今宵は名に負ふ園生
 の花もいたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみや
 うやう聲そ
 はりゆくも
 猶あかぬわざながら、流石にあはれは添へつべし。
 晴間なれ月をひかよといひくくて、

三月五
祝

この言はれをまはさしむるは、
 春海

*國學者。
江戸の人。
（一六一—一六八）



清水濱臣像

にやあらん。あ
 なあやし、あなあ
 やし。そも此の

砧を聞く

*清 水 濱 臣

そらなが免まや今宵あゝさん。
 あたからす雲間のあげもうとくとをも、
 月まつむしよせ免て語らへ。

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近
 し。しきるもたゆみ、たゆむもまた
 しきる。雁がねの聲の砧をさそふ
 にやあらん、砧の音の雁がねに通ふ

あゝさん
 近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近
 し。しきるもたゆみ、たゆむもまた
 しきる。雁がねの聲の砧をさそふ
 にやあらん、砧の音の雁がねに通ふ

國學者。
伊勢の人。
(三〇一三三)

音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆる
か。皆あらず、同じく人の心のさびしきなり。(泊酒舎集)

述 懷

本居宣長



本居宣長像

昨日は今日の昔にて、はかなくのみ過ぎに過ぎゆく世の
中をつくづくと思へば、あはれわ
が世もいくほどぞや。手を折り
て數ふれば、はや三十ちにも餘り
にけり。命長くて七十ち八十ち
生けらんにてだに、早く半ば過ぎぬるよと思へば、まだよ
ごもれるやうなる身も、行先程なき心地のして、心細くぞ
覺ゆる。かくのみはかなく心なき草木鳥獸の同じつら

に、何すとしもなく明し暮しつゝ、生ける限りの世を盡し
て徒らに苔の下に朽ち果てなんは、いと口惜しく、言ひが
ひなかるべき事と思ふにも、萬にいたり少く拙き身にし
あれば、何事をし出でてかは世の人にも數まへられ、亡か
らん後の世
に朽ちせぬ
名をだに留
めましと、いと人々に似ぬ愚かさへ取り添へてぞ悲し
く心憂かりける。さりとして、はた身をえうなきものには
ふらかしはつべきにしもあらず。かくのみ拙き愚かな
る心ながら、何業にまれ怠なくわざと心に入れて勉めた

とまじくぬれやまも。いび人のこころ
ぬりあけほふらさるるをわ
宣長

らんには、終には一つ故づきて、なのためにし出づる節もな
どかはなからんと、あいな頼みにかゝりてなん。(鈴屋集)

六 暁の誕生

* 島崎藤村

東の空のほのくもと

汝がせはらふをえんよけん。

この曉れさむを見て、

運命をいりりうらなはん。

うたにさやけき紅の

光をはらう明星や、

やうしや女となるまぢん

* 名は春賦
文學者。
(三三)

汝がひさびさのうらなはん。

朝風流をまよふごとく、

まよふ雲の袖を吹き、

霧はうねるまよふらまき、

まら黎明を呼びよらん。

けがれく朝の娘れたに

汝が初夢をまよふまぢん。

つばさをやうく囀の

道の花もまよふかれ。

めづき潮は流みして、

朝々に白くまよふらん。

まじり混じりたる世のありさま
 なまじりたる夢れ風情を
 かくまひてかくる世のありさま
 思ふ心もなまじりたる
 そのうらみは眼も
 何ぞかんとぞふらん
 まじりたる世の中
 かくまひたる世の中
 空もやまじりたる
 何ぞのけさもよらん
 行末花とけひたる

わたりあふる夢をさすもぬも
 かゝるゆへに朝のこと
 心れ空の朝うらん
 (若村詩集)

七 家庭

加藤 咄 堂

家庭は女性の天地なり。その中、悉く愛を以て満たさる。これあるところ、九尺二間の裏長屋にも、百花爛漫たる春を見るべく、これなきところ、金殿玉樓と雖も、秋風落莫の感なき能はず。愛は家庭の連鎖なり。夫婦、親子、兄弟、主従、皆之によつて結ばる。家庭の主人たるべき女性は、まことに愛の権化たるべきものならざるべからず。よし、

*名は與一郎。
 著作家。
 (四五〇)

舅姑のために苦しめられ、義弟・従妹のために嫉視せらるることありとも、そは己が愛の力の足らざるが故なることを自覺して、怨むることなく、怒ることなく、これに耐へ、これに忍び、報ゆるに渾身の愛を以てせば、何人かこれに感ぜざらん。見よ、頑強なる堅氷も、そよ吹く春風には、終に解け去るにあらずや。

人或はいふ、日本の家庭は父母兄弟同居するがゆゑに、紛擾常に絶えず」と。これ、その一を知りて、未だその二を知らざるものゝみ。薔薇の刺あるを見て、その花を見ざるものあらば、誰か其の愚を笑はざらん。蜂の螫あるを知りて、その蜜を釀すを知らざるものあらば、誰かその愚を

笑はざらん。舅姑と新婦とは、或は新舊の思想の衝突によりて、感情意見の一致せざることあらん。然れども、家事の整理に於て、隣保の交際に於て、子女の鞠育に於て、經驗と熟練とを積みたる父母の、常に傍にあるあらば、新夫妻の上に利益を興ふることいかばかりぞ。かの相協はざるが如きは、家庭を組織する人々の人格にありて、組織の罪にあらざるなり。況や、妻たり婦たるもの、渾身の愛情を盡して夫を助け、又舅姑に事ふるあらば、感應の力は、遂に頑固の人をして婉順の人たらしむべきをや。

偉人の大業を成すも、良妻の内助の功に由ること多し。歐洲の外交界に辣腕を振ひたる鐵血宰相をして、

*
獨逸の名相。ビ
スマークの諱名。
(1815-1898)

「予が妻に負ふところの如何に多きかは、これを口にす
る能はず。」

と云はしめたるビスマーク夫人の内助の功は、毫も外交
に現れずして、しかも、能く歐洲の天地を動かせり。英の
グラッドストーンは近世の大政治家なり。彼をして英
國の富を傾くとも買ひ得ざる心の平和を得しめしもの
は、其の夫人カザリンの淑徳なり。露のトルストイは夫
人の淨寫によつて一代の著述を印刷し、失明の經濟學者
フォーセツトは其の夫人の助によつて斯學に貢獻せり。
ヂスレリーが大演説を試みんとして議會に急ぐ途次、同
車せる夫人は、馬車の扉のために指を挫かれしかども、其

(一) 英國の賢相、
(1809—1898)

(二) 露國の小説家、
思想家。
(1882—1910)

(三) 英國の經濟學者、
政治家。
(1833—1884)

(四) 英國の政治家、
小説家。
(1804—1881)

の事の夫の心を痛めしめんことを恐れ、苦痛を忍びて一
言だに發せざりきといふが如きは、實に、これ、人の妻たる
者の記憶すべき佳話にあらずや。妻たる道はかゝる獻
身的愛情にあり。かの徒らに巧言令色、夫の歡心を得る
ことをのみ謀りて、其の補助者たるべき實を忘るゝもの
の如きは、眞に人の妻たるものゝ道にはあらざるなり。
從順は女性の美德なり。然れども、屈從は美德にあらず。
女訓に曰く、

女子は内に在りては父母に従ひ、嫁しては舅姑、夫に従
ふと申すは、事新らしく申すにも及ばず候へども、いか
に夫の仰を背かざるが道にて候とて、夫が公の御法度

*佐久間象山著。

に背き、悪事などいたし候を諫めざらんは、大いなる誤に御座候。いかにも詞あらゝがぬやうに、みつからの心を静めて、しめやかに、理を盡して異見いたし候が、妻たるものゝ道にて候。それも聲高に囂しく、夫を罵り辱しむる事はひがごとにて候。所詮は、自らの身正しければ、夫も妻の申す事を用ひ、家内親類中も治まり調ひ申すものにて候。

これ、今もなほ女性の教訓とすべき言なり。女性の身には、妻たる外、母たる任務あり。母の心身は其の生子に遺傳し、母の品性は其の子女を感化す。世間、何人か母の懷に抱かれざるものあらん。之を育成し、之を

* 明の仁孝文皇后の原書「女四書」中の一篇。本文はその批儀草にあり。

陶冶せんことも、一に母たる女性の責に屬す。内訓には、子女教育の道を説いて、

これを教ふる者は、導くに徳義を以てし、養ふに廉遜を以てし、率ゐるに勤儉を以てし、本づくに慈愛を以てし、臨むに嚴格を以てして、其の身を立て、其の徳を成す。慈愛も姑息に至らず、嚴格も恩を傷ふに至らず。恩を傷へば則ち離れ、姑息なれば則ち縦にして教行はれず。詩にいはく、則ち色し、載ち笑ひ、怒るにあらず、伊れ教ふといへり。

子女の目に映ずるものは父母なり。而して、その最も近接するは母なり。されば、母は、實に、自ら正しうして、子女

に其の範を示さざるべからず。婦徳の闕如は、啻に家庭に禍するのみならず、實に社會を蠱毒するものなり。家庭の王國に主たる女性の責も亦大なるかな。(女性觀)

八 賢母の教訓

湊川にて討たれし楠木判官が首をば六條河原京都六條なる賀茂の河原。に懸けられたりけるが、後尊氏その首を召して、朝家私日久しく相馴れし舊好のほども不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。とて、遺跡へ送られける情の程こそあり難けれ。

楠木が後室子息正行、之を見て、判官今度兵庫へ立ちし時

* 帶刀舍人の略稱。東宮侍衛の武官。正行時に此の職にありき。

様々申し置きし事ども多かる上、今度の合戦に必ず討死すべしとて正行を留め置きしかば、出でしを限りの別れなりとはかねてより思ひまうけたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じてかはりはてたる首を見るに、悲しみの心胸に満ちて、歎きの泪せきあはず。今年十一歳になりける帶刀* 帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有様、母が歎きのせん方もなげなる様を見て、流るゝ泪を袖に抑へて持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、すなはち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を右の手に抜き持ちて、袴の腰を押下げて、自害をせんとぞし居たりける。

母急ぎ走り寄りて、正行が小腕に取りつき、涙を流して申しけるは、柝檀は二葉より芳しといへり。汝をさなくとも、父が子ならばこれ程の理に迷ふべしや。兒心にも能く、事のさまを思ひて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より歸し留めしことは、全く後を訪はれん爲にあらず、腹を切れとて残し置きしにもあらず、われ假令運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いつくにも御座ありと承らば、死に残りたらん一族若黨どもをも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立てまゐらせよ。』といひおきし處なり。その遺言具さに聞きてわれにも語りし者が、いつの程に忘れけるぞや。

かくては父が名を失ひはて、君の御用にあひまゐらせんことあるべしとも覺えず。と泣く、諫め止めて、拔きたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣き倒れ、母と共にぞ歎きける。その後よりは、正行、父の遺言、母の教訓、心に染み肝に銘じつ、或時はわらはべどもを打ち倒し頭をとる眞似をして、これは朝敵の首を捕るなりといひ、或時は竹馬に鞭を當て、これは尊氏を追ひかくるなんどいひて、はかなき手ずさみに至るまでも、只この事をのみわざとせる心の中こそおそろしけれ。 (太平記)

又、阿倍野。攝津國東成郡にあり。正平二年、正行、賊將細川顯氏及び山名時氏との地に戦ふ。
一名大江橋。今の天満天神兩橋の間に其の址あり。

九 如意輪堂

安部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせきおとされて流るゝ兵五百餘人。かひなき命を楠木に助けられて、川より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚を結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情あるものなりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば、敵ながら、其の情を感じずる人は、今より後心を通せんことを思ひ、恩を報ぜん

正平三年正月、正行高師直と四條畷に戦ふ。

譽田林の戦及び安部野の戦。

足利尊氏。
足利直義。

山城國久世郡淀町。
同國綴喜郡八幡町。

する人は、やがてかれの手に屬して後、四條畷の合戦に討死をぞしける。さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうちまけて、畿内多く敵のために犯し奪はる。遠國又蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢などを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられる。京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うちつれて、十二月二十七日吉野の皇

*延元元年五月十七日。

居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候ふ間、危きを見て命を致す所かねて思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢はんぬ。その時、正行十一歳に罷りなり候ひしを、合戦のにはへは伴はて河内へ返し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅ぼし、君を御代に即けまゐらせよ。と申し置きて死にて候ふ。然るに、正行正時已に壯年に及び候ひぬ。この度われと手を碎き合戦仕り候はずば、且は亡父の申し、遺言に違ひ、且は武略のいひ甲斐なき謗に落つべく覺え

候ふ。有待の身、思ふに任せぬ習にて病に犯され、早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直師泰にかけあはせ、身命をつくし合戦仕りて、かれらが頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行正時が首をかれらに取られ候ふか、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らんために參内仕つて候ふ。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざるに、先づ直衣の袖をぞ濡らされける。主上即ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗はしく、

諸卒を照覽ありて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ、叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返すくも神妙なり。大敵今勢をつくして向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度にあたり、變化機に應ずる事は勇士の心とするところなれば、今度の合戦手を下すべきにあらずといへども、進むべきを知りて進むは時を失はざらんがためなり。退くべきを見て退くは後を全うせんがためなり。朕汝を以て股肱とす、慎みて命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只之を最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

後醍醐天皇御陵。
吉野山、藏王堂
の東北に在り。
御陵の前方にあ
り。

正行、正時和田新發意舍弟新兵衛以下、今度の軍に一足も引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

あへらじとか添て思へむ、梓弓

あき數にゆる名をぞとむる。

と一首の歌を書き留め、逆修のためとおぼしくて、各鬢髪を切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野をうち出で、敵陣へとぞむかひける。(太平記)

一〇 秋の力

綱島梁川

名は榮一郎。
哲學者。
(二五三—二五七)

あれこれをあつめて春は臘かな(芭蕉)

「あれこれをあつめて霞む春の臘」を人生の夢とも見ば、秋は直にこれ覺醒なり、事實なり。蔦紅葉の中より露れ出づる節くれだちし樹身、枯芝生の底より躍り出づる偃蹇たる雲根、何れか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く瞻かに言ひ出づるものは黃柚なり、赤柿なり。一美術家語りて曰く、「吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに結び出でたる赤き柿の實の累々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びき」と。げにも秋の姿を宛ら具象にして描き出せるものありとせば、その碧落の空に躍如として結び出でたる

赤柿を措きてはまたとあらじ。秋は實に此の累々たる赤柿に其の全幅の表現を得たる趣あるに非ずや。

見よ、秋の潭に淵黙の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帯び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬚眉を鑑すべく、夢を歌ふ満園の蟲しぐれ、人の深省を誘ふ。空際ははやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の砢砢として厲しき、あはれ秋の萬象、何物か總てこれ透明、照徹、剛克、勇健の氣を以て貫かざる、何物かすべてこれ哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして事實なり。人は秋に立つて、直に事實と面相接するなり。

秋は何等の天文地采の形式を藉らざる裸體のまゝなる思想なり。そは如々たり、故に明瑩なり、澄徹なり、而して又充實なり、豐贍なり。春草の紗、夏木の衣、總て名殘なく脱ぎすて、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄雄しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。若し秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳裾、蘆花淺水の帶、桔梗、刈萱、尾花が波の袂も、輕き姿なるべし。あはれその澹如たるすゝしきは、彼の哲人道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。病間録

一一 歌話二則

*源有仁。
輔仁親上の子。
初歌管絃に見ず。
(七四—七五)

*花園左大臣家に始めて参りたりける侍の名簿のはしがきに、「能は歌よみ」と書きたりけり。大臣、秋の初に、南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子に人參れ」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はぬ」と申して、この侍参りたるに、たゞ「さらば、汝おろせ」と仰せられければ、まゐりたるに、「汝は歌よみな」とありければ、畏まりて、御格子おろしきして候に、「この促織をば聞くや、一首仕うまつれ」と仰せられければ、「青柳の」と初の句を出したるを、候ひける女房達をりにあはずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「物を聞きはてずして笑ふやうやある」と仰せられて、「とくつかうまつれ」とあ

りければ、

青柳のみそりの絲をくりおきて、

夏へて秋ははたおりぞ鳴く。

とよみたりければ、大臣感じ給ひて萩おりたる御直垂、推し出して賜はせけり。

寛平歌合には、つ雁を、友則

春霞かすみていにし雁がねは、

今ぞなくなる、秋霧の上に。

とよめる、左方にてありけるに、五文字を詠じたりけるとき、右方の人こゑづくに笑ひけり。さて次句に「かすみていにし」といひけるにこそ、音もせずなりにけれ。おなじ

宇多天皇の御代
年號
紀氏
古今集撰者の一
人。

ことによ

俗名橋水愷。
山人。
白河天皇の御代
の人。
官幣中社三島神
社
伊豫 越智郡大
三宮浦に鎮座。

能因入道伊豫守實綱に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏のはじめ、日久しく照りて、民のなげき淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり。試みに詠みて三島に奉るべき由を、國司頻りに勧めければ、

あまの川苗代水にせきくだせ、

あまくだります神ならば神。

と詠めるを、みてぐらに書きて、神司かんつかきして申し上げたりければ、炎旱の天俄かに曇りわたりて、大いなる雨降りて、枯れたる稻葉おしなべて緑に反りにけり。忽ちに天災を和ぐるこそ、唐の貞觀の帝の蝗を吞めりける故事にも劣

唐、太宗文武皇
帝、貞觀は同帝の御
代の年號。

*岩代國白河部にあり。

らざりけり。この入道は至れるすき者にてありければ、
都をば霞ごごもに立ちしかご、

あきかせぞ吹く白河のせき。

ご詠めるを、都にありながら此の歌を出さんご念なし
ご思ひて、人にも知られず、久しく籠り居て、色黒く日にあ
たりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたり
ごぞ披露しける。(古今著聞集)

一二 栗栖野

兼 好法師

神無月の頃、栗栖野といふ處を過ぎてある山里に尋ね入
る事ありしに、はるかなる苔の細路を踏みわけて心細く

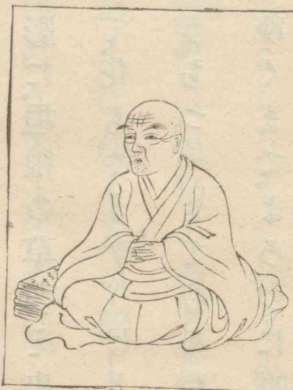
住みなしたる庵あり。木葉に埋もるゝ、篋の雫ならでは

つゆおとなふものなし。閑伽

棚に菊紅葉など折り散らした

る、さすがに住む人のあればな

るべし。かくてもあられける



兼好法師像 (東京帝國博物館藏)

よとあはれに見る程に、かなたの庭に大きな柑子の樹

の枝もたわゝ

になりたるが、

まはりをきび

しく圍ひたりしこそ、少し事さめて、此の樹なからましか
ばと覚えしか。(徒然草)

花よりりてつぎをば
春のれあつきわはくく
さくさくわて花よりり

兼好法師筆蹟

春はたゞ花のひ
とへに咲くばか
り、ものゝあは
れは秋ぞまされ
る。(繪巻)

一三 四時のあはれ

兼好法師

折節の移り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物」のあはれ
は秋こそまされ。」と人ごとにいふめれど、それもさるもの
にて、今一きは心も浮き立つものは春の景色にこそあめ
れ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日
影に、垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたり
て、花もやう／＼けしきだつほどこそあれ、をりしも雨風
うちつゞきて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になり
ゆくまで、よろづに唯心をのみぞなやます。花橘は名に
こそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も立ちかへり、戀

まつまつ花橘
の香をかげば、
昔の人の袖の香
ぞする。(古今)

陰曆四月八日。
佛生會。
賀茂の葵祭。四
月の中の酉の日。

しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおほつかなき
さましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世
のあはれも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそ、
げにさるものなれ。五月、菖蒲ふく頃、早苗とる頃、水鶏の
叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔
の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓又
をかし。

棚機まつるこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になる
ほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稻田かりほ
すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分の

おぼしきことい
はぬは、げにぞ
腹ふくる心地し
ける。天朝のま

毎年十二月十九
日より三日間、
佛名を唱へて年
中の罪惡を懺悔
する法會。
年の終に御陵墓
などに遣はさる
る勅使。

あしたこそをかしけれ。言ひつゝくれば、皆源氏物語枕
の草子などにことふりにたれど、同じ事又今更にいはじ
とにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざな
れば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにてかいやりす
つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。
さて、冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀
の草に紅葉の散りと、まりて、霜いと白うおけるあした、
遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ人
ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじ
きものにして、見る人もなき月の寒けくすめる二十日あ
まりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つな

どぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそ
ぎに取り重ねて、もよほし行はるゝ様ぞいみじきや。追
讎より四方拜に續くこそおもしろけれ。つもごりの夜
いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門叩
き走りありきて、何事にかあらん、事々しくのゝしりて、足
を空にまどふが、曉がたよりさすがに音なくなりぬるこ
そ、年のなごりも心ほそけれ。亡き人の來る夜とて、魂祭
るわざは、此の頃、都にはなきを、あづまの方には、なほする
ことにてありしこそあはれなりしか。かくて明け行く
空のけしき昨日にかはりたりとは見えねど、引きかへ珍
しき心地とする。大路のさま、松立てわたして、花やかに

嬉しげなるこそ又あはれなれ。(徒然草)

一四 梅一輪

服部氏。(四一三三七)
正岡氏。(五七一三六六)
興譲氏。(三六一二四四)
上島氏。(三三二二九九)
松尾氏。(三三二二九九)
榎本氏。(三三二二九九)
大島氏。(三三二二九九)
(三三二二九九)

梅一輪一輪ほどのあたゝかき
祇園會や錦のうへに京の月
富士一つ埋みのこして若葉かな
行水のすてどころなし蟲の聲
白露をこぼさぬ萩のうけりかな
木あら物のよほるゝ音や秋此風
聲かきて猿の齒白し峰乃月
ぞもし火を見まば風あそ夜の雪

嵐雪
子規
蕪村
鬼貫
芭蕉
千代
其角
蓼太

*名は成行。
學博士。
(五七一)

一五 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も雫も天より降るものゝ面白からぬはなき中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蓋ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ角もあれ、そと下す風に連れてちらちらと降り出づる始より、檐の玉水日に耀ふ光長閑に融けつくす終まで、いづれかをかしからざらん。
まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返しなどしつつさら〜と降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。

又春の雪の大きく軽らかに降りて、落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々しさもなつかしく、消ゆるくも少しは積りて、茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松梅、樅なんどの梢には天華俄かに落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。されど降る最中の雪の、見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば、雪細ならず、暖かさまだしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、その霏々紛々として盛に降るに當つては、櫻花の春天に翻るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には對

岸を虚無に封じて仙境の縹緲をあざむき、半衢の陋街には連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑はしむ。鶴毛亂れ飛び、鶯毳飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には、廣きところよりも狭きところ好し。玉屑珠塵いと清き事は清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる最中は、遠きは全く見えずして却つて狭くなり、近きは聊か霞みて狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪よろしく、廣野よりは市中の園よろし。

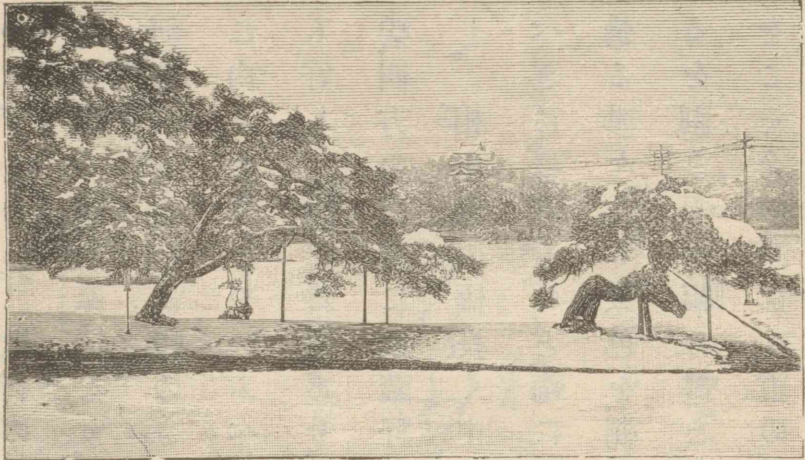
霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひつくして

馬をさへながむるゆきのあしたかな。(西條)

鏡新に明かなる空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊り去つて銀曇なき地の皎々と白きが見る目はゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の取りどころなきだに、面白く思はる。馬をさへ眺むると人のいひたる旦、朝日の光いと花やかなるに、疎林に禽起つて飛んでまた還る、有りふれたる郊外のさまなからよし。

西の京は金閣銀閣眞如堂、岡崎・東山・清水、皆畫とすべし。梅の尾・槇尾は見ねば知らぬぞ口惜しき。木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、

(一) 麴町區にあり、日枝神社を祀る。
(二) 山王臺の東南麓にありしが、今は埋めて宅地となせり。
(三) 上野公園の傍にあり。



宮城の外雪景

壁の簪を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓に鳴きたるなど、二十年の昔の、余の胸に猶あざやかなる心地す。
東の京は御溝の水穩かに、浮寝の禽の夢も安けく、雪に閑なる大御代の午、また比なくめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池のありし昔いたづらに懐かし。不忍の池一望千里の景は

隅田川の右岸、
淺草公園に近き
小丘。

深川區越中島よ
り京橋區新佃島
に架したる橋。
深川區越中島の
一名。

いはずもあれ。敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、
之も捨て難き風情なり。暮れて猶暮れ難き雪の暗夜に
何をかものいふ鴨のさゝめきを聞きたる、水に色なく、聲
に白さありとやいふべき。隅田川は待乳山を望みたる
も好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の
碧、四方の白、實に武藏野をわきて流るゝ川なりといふべ
し。相生橋の橋長く、中島の島の小なる、取り出でて言ふ
べきにはあらねど、南に涯なき海をすかして海鷗も雪に
曇る渺々たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿した
るを劃りて一幅の畫となしたる、欣ぶべく、賞すべく、此處
をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心録)

歌人。
俊成の子。
(八三十一卷)

歌僧。
俗名良峰玄利。
寛平時代の人。

一六 駒とめて

百首歌奉りしとき

藤原定家朝臣

よめて 袖うらふかやもしな
てめわなまれ 雪のゆめれ

花ざかりに京を見やりて

よめる

素性法師

みわたさば 柳さくらをこまゝいおせし
都ぞ けろめにしきなりたる

歌僧。
俗名藤原定長。
(一八六〇)

五十首歌奉りしとき

寂蓮法師

くわさゆきまきのみなをばさうねども

かすかたおつる宇治の紫舟

蓮の花を見てよめる

僧正遍昭

けろすやまのよごりたままぬ心も

なつかさう露を玉とあやむ

題知らず

藤原家隆

いからまむこぬ夜あまたの杜鰈

また志さおもば村雨のそら

歌人。
光隆の子。
(一〇八一—八七〇)

歌僧。
俗名佐藤義清。
(七七一—八五〇)

題知らず

西行法師

心なまきりにもあきれば知らまきり

時たら浮のあきれゆぐれ

惟喬のみこの狩しける供にまかりて宿りに歸

りて、夜一夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日の

月も隠れなんとしけるをりに、みこ酔ひて内に

入りなんとしければ、よみ侍りける。

在原業平朝臣

あかなんたまたまも月のかゝる

山のはよがそりまほもあな

歌人。
阿保親王の第五子。天長中、在原を賜はる。
(一一五〇)

文德天皇の皇子
惟喬親王。
わすれては夢か
とぞ思ふ、思ひ
きや、雪ふみわ
けで君を見んと
す。(伊弉諾)
水無瀬の宮。
攝津國三島郡に
あり。昔、惟喬
親王の別墅のあ
りし處。

河内國北河内郡
にあり。古の遊
獵地。

一七 小野の宮

とすきては
おをひたや、
花ざあり、
とるむるにかぎ
祝ひしを、
交野の野邊よ
ぎの時々を
袖比つゆ。
みとあれば、
夢あとぞたもふ。
みあせの宮比
御せもつあへて、
君を八千代と
天の川原や
御狩くらあゝ
思む出づきむ、
睦月ばかりの
深雪ぬりつゝ

山城國愛宕郡に
あり。惟喬親王
幽栖の處。

大阪の淨瑠璃作
者。
CHIN-IZEM

道さへにかぎ。

あどくしくも

おとづきて

見あげまつれば、

何となく

物のあはきぞ

身よあみまさる。

夢りうつゝり、

小野の山

雪ふみかけて

君を見んぜは。(箏曲集)

一八 順禮唄

近松半二

「普陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山にひゞく瀧つ
瀨」年はやうくどほくの道をかけたる笈摺に同行二

* 伊國海草郡紀
三井寺村 剛寶
寺。
西國順禮の札所。

人「ご記せしは、一人は大悲の蔭頼む、「故郷をはるくこ
こにきみる寺、花の都も近くなるらん。」順禮に御報謝」ご
いふも優しき國訛。「てもをらしい順禮衆。それく
報謝進ぜう。」と、盆にしらけの志。「あいく、有り難うござ
ります。」ごいふ物越から褻はづれ可愛らしい娘の子。「定
めて連衆は親御達。國はいづく。」と尋ねられ、「あい、國は阿
波の徳島でござります。」う、何ぢや、徳島。さつても、それ
はまあ懐かしい。わしが生れも阿波の徳島。そして、父
様、母様と一緒に順禮さんすのか。「いえ、其の父様や
母様に逢ひたさ故、それでわし一人西國するのでござり
ます。」ご聞いて、ごうやら氣に懸る。お弓は尙も傍に寄り、

「う、父様や母様に逢ひたさに西國するごは、どうした譯
ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達の名は何さいふ
ぞいの。」「あい、どうした譯ぢやか知らぬが、三つの年に父
様や母様も、わしを祖母様に預けて、何處へやら往かしや
んしたげな。それで、私は祖母様の世話になつて居たけ
れご、ごうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい。それで、
方方尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波の十
郎兵衛、母様はお弓と申します。」ご聞いて、悔り、お弓は取り
つき、「これく、あ、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つ
の歳別れた祖母様に育てられて居た。」ごは疑もない吾が
娘、ご見れば見る程稚顔、見覚えのある額の黒子。やれ吾

*
上君の重寶國次
刀を紛失せし
めし難にて。

が子か、懐かしやと云はんこそせしがいや待て暫し。夫婦
は今にも取らるゝ命、元より覺悟の身なれども、親子とい
は、此の子にまで、ごんな憂き目が懸らうやら。それを
思へば、なまなかに名乗だてして憂き目を見んより、名
らで此の儘返すのが、却て此の子の爲ならんこ、心を静め、
よそ／＼しく、おゝそれはまあ／＼、年はも行かぬに、遙々
の處をよう尋ねに出さつしやつたのう。其の親達が聞
いてなら、嘸嬉しうて／＼飛び立つやうにあらうが、儘な
らぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、かはいゝ子を振
り棄て、國を立ちのく親御の心、よく／＼の事であらう程
に、むごい親と必ず／＼恨まぬがよいぞや。「いえ／＼勿

體ない。何の恨みませう。恨むる事はないけれども、小
さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供
衆が、母様に髮結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやん
すと見るこ、わしも母様があるなら、あのやうに髮結うて
貰はうものこ、羨ましようござんす。ごうぞ早う尋ねて逢
ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しう
ござんす。」と泣いじやくりするいちらしさ。
母は心も消え入る思。「さても／＼世の中に、親となり、子
ご生るゝ程、深い縁はなけれども、親が死んだり、子が先だ
つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方ごればと尋ねて
も、顔も處も知らぬ親達。逢はれぬ時は詮ない事。もう

尋ねずご、へ往んだがよいわいの。「いえ、戀しい父
様や母様。たごひいつまでか、つてなき、尋ねうと思ふ
けれど、悲しい事は、一人旅ちやて、何處の宿でも泊めて
はくれず。野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては
擲かれたり、こはい事や悲しい事。父様や母様と一緒に
ゐたりや、こんな目には逢ふまいものを。ごここにどうして
居やしゃんすぞ。逢ひたい事ぢや。逢ひたい。」とわつと
泣き出す娘より、見る母親は堪りかね、お、道理ぢや、か
はい、ちらしや。」と我を忘れて抱き付き、前後正體なげさ
しが、是程親を慕ふを、何と此の儘往なされう。いつそ打
ち明け、名乗らうか。いや、それでは此の子も同じ罪。

其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが、爲と「お、段々の
様子を聞き、吾が身の様に思はれて、悲しいとも情ない
も、言ふに言はれぬ事ながら、とかく命が物種、まめでさへ
居りや、また逢はれまいものでもない。これ、仕つけぬ旅
に身を痛め、煩でも出りや、わるい。何處を證據に尋ねう
より、其の祖母様の方へ往んで居るとの、追つつけ父様や
母様が逢ひにいてちや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直して、
是からすぐ國へ往んで、随分まめで、親達の尋ねて行か
しやるのを待つて居るのがよいぞや。」と宥め賺せば、聽きわ
けて、「あい、忝うござります。お前が其の様に言うて、
泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思は

れて、わしや此處が往にとむない。そんな事なと致しま
 せう程に、まうし、お家様、お前のお側に、いつまでもわたし
 を置いて下さりませ。」え、悲しいこと言ひ出して、また
 泣かすのかいの。先まづにからわしも子のやうに思うて、爰
 に置きたい、往なすとむないと様々思ひ廻せども、爰に置
 いてはごうも爲にならぬ事があるによつて、それでつれな
 う往なすのちや程に、聽きわけて往んだがよいぞや。」と言
 ひつゝ、内へはり箱の底を探して、豆板のまめなを悦ぶ餞
 別べつと、紙に包んで持つて出て、「これ、なんぼ一人旅でも、たん
 と錢さへやりや泊める。僅かなれども志、此の銀かねを路銀
 にして早く國へ往にや。必ずくわづらうてばしたも

んな。」と銀を渡せば、押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判
 といふ物をたんと持つて居ります。そんなりや、もう參じ
 ます。忝かたじけなくうござります。」と泣くく立つを引き留め、それ
 はさうでも、此は私が志」と無理に持たして塵打拂ひ、「これ
 もう往にやるか。名残が惜しい。別れとむない。これ
 今一度顔を。」と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れがた
 なき憂き思。それと知らねど、誠の血筋。名残惜しげに
 振返り、「何處をどうして尋ねたら、父様や母様に逢はれる
 ことぞ。逢はしてたべ、南無大慈の觀音様。」父母のめぐ
 みも深き粉川寺佛の誓たのもしきかな。」泣くく別れ
 行く……………。(傾城阿波の鳴門)

元暦元年二月七日。

一九 小枝の笛

さる程に一の谷の軍敗れしかば、武藏國の住人熊谷次郎直實、平家の公達の助船に乗らんとて汀の方へや落ち行きたまふらん。あつばれよき大將軍と組まばや。と思ひ、細道に懸つて汀の方へ歩まする所に、茲に練貫に鶴縫うたる直垂に萌黄にはひの鎧着て、鉞形打つたる兜の緒をしめ、黄金づくりの太刀を佩き、二十四挿いたる切文の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連錢葦毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりける者一騎、沖なる船を目かけ、海へさつと打入り、五六反ばかりぞ泳がせける。

直家*

熊谷あれはいかに、よき大將軍とこそ見まゐらせて候へ。正なうも敵に後を見せ給ふものかな。返させ給へ。と扇を揚げて招きければ、招かれて取つて返し、汀に打上らんとし給ふ處に、熊谷波打際にて押並べ、むずと組んでどうと落ち、取つて押へて、首をかゝんとて兜をおし仰のけて見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。我が子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかりなるが、容姿まことに美麗なり。「そもく如何なる人にて渡らせ給ひ候やらん。名のらせたまへ。助けまゐらせん。」と申しければ、まづかういふ和殿は誰ぞ。「物の數にては候はねども、武藏の國の住人熊谷の次郎直實。」と名のり申す。「さては汝がため

には好い敵ぞ。名のらずとも首を取つて人に問へ。見知らうずるぞ。」とぞ宣ひける。熊谷あつばれ大將軍や。此の人一人討ち奉つたりとも、負くべき軍に勝つべきやうなし。又助け奉つたりとも、勝つ軍に負くることもよも有らじ。今朝一の谷にて、我が子の小次郎がうす手負うたるをだにも、直實は心苦しき悲しみ給はんずらめ。助けまゐらせん。とて、後を顧みたりければ、土肥梶原五十騎ばかりぞ出て来る。熊谷涙をはら／＼と流して、あれ御覽候へ。いかにもして助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵雲霞の如くに

土肥實平。
梶原時。

満ち／＼とて、よも遁しまゐらせ候はじ。あはれ同じうは直實が手にかけて奉つて、後の御供養をも仕り候はん」と申しければ、たゞ何様にも疾う／＼首を取れ。」とぞのたまひける。熊谷餘りにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとも覺えず、目もくれ、心も消えはて、前後不覺に覺えけれども、さてしも有るべき事ならねば、泣く／＼首をぞ搔いてける。「あはれ、弓矢取る身ほど口惜しかりける事はなし。武藝の家に生れずば、何しに只今かゝる憂目をば見るべき。情なうも討ち奉つたるものかな。」と、袖を顔に押當てて、さめ／＼とぞ泣き居たる。

首を包まんとて鎧直垂を解いて見ければ、錦の囊に入れられたりける笛をぞ腰にさゝれたる。「あないとほし、この曉城の内にて管絃し給ひつるは、此の人々にておはしけり。當時味方に東國の勢何十萬騎か有るらめども、軍の陣に笛持つ人はよも有らじ。上臈はなほも優しかりけるものを」とて、これを取つて大將軍の御見參に入れたりければ、見る人涙を流しけり。後に聞けば、修理大夫經盛の乙子、大夫敦盛とて、生年十七にぞ成られける。それよりしてこそ、熊谷が發心の心は出で來にけれ。件の笛は祖父忠盛、笛の上手にて、鳥羽の院より下したまはりけるを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たる

によりて持たれたりけりとかや、名をば小枝と申しけり。(平家物語)

二〇 三條小宰相どのへ 烏丸光廣

*公卿。歌人。書家。
(三三九—三三〇)

一首申しまゐらせ。就ね、をもし築子代の
色もかゝる鳥丸光廣の枝をまねるは後ひと
し、よき越したまふべし申、疎にやてたう
光えまゐらせ。申すも、いふもねども、勇持ち
やさしく、心おとなしく、まねるのいふほとなりて
苦のむすも、お怒りして、孫子の末くまげも

山菜もやうにとうち影ひまゐらむより
昔に任せ申しまゐらせし。

第一、慈悲の心ありて人を憐み、慈悲の心
までも露の情を思ひしむひおもては唯、春
柳の悠の風に靡くが如く物知らずして、人の
心を酌みし知り、憐る心を押し直して、憐み
おまゐる。又、心の中心、石や木も望み
あたなる心をむらあまをさるる、行あまふ。
「良臣二君ははくす、良女あまに見えぬ」と

あれは、れどもその理を物夕心に思ひたまひ
是非、神や佛の心ありもおもひたまふ。
第二、お逢人なく、泣き泣きし時、内に世念の
るいとも、物かその景色を思ふほども見せず
何となく、うち向む、喜は春柳、梅、桜、雪、
雲雀、夏は水の音、草蒲、橘、杜若、雲、
秋は月、お葉、露、お霧、鹿、冬は雪、お
雪、雲、鴨、鷹、何れもそのをりに觸れたる物
語を、して、心に取りはかしたまふ。さりとも、

手あさまくの飾り腫まげなるも、御自分の御
ま。唯何になくながらへて、世々の志の就
あまやうに愛しくいはんるこそあらまほ
しくいへ。

第三、若し使ふ人の諷諭を何事も思ふやう
になくいふも、忍びやかたよまひ言をもこころひ
つゝ世あまひべい。それをもゆき入れずい
は、お櫃もあぐらふ。さりとて、まなごの関
心をあまひも治まはらるる惜しくい。如何に

みめあまのしき兒、女房なりとも、後をまて
たる顔は見えたるのまゝ。しかもあさま人
お高にぬるも、能く浅ましくい。まをまひ
をも聴くまじきものと思ひたまは、里へ返し
まは、さのみ若方もあはれまじ。男も女も
あまの短氣にまは、難むとも出来、若し使
はれいあも、正座あはれ、まをこころひ
名をまき、後は逃げ馳するまはに。
みよし聖あまは、川の川流に

鴨が鳴くなま山陰中へ。

これ吉野の川のかたのれいへくまふ。鴨は
水はさふ住むものなれども、餌りまきまな
住み難く、川渡を、水の淀むまに遊ぶ。な
況や人留の烈しきまなながら人難ふ。

茅は夫婦の間、高きも低きも、睡まなくん
るこそよきゆえも心にくうも侍らぬ。た
兼代を送りたまふも、聊かまいたん物と
されぬやうに、物々晴みゆえんり、いやく子秋

兼代を保ちたまふ。さへ又、世念の
城をその思ふべしとて、浮世の有様を
ついでとらて、心をものやかに過ぐら
おひひき、行く末善きもののみをあらべ
歌に、

事足らぬ世をなげき、鴨の是れ

みじかきこそ、言かぶ瀬もあれ。

さへ又、心なげき、思ふまは昔の道に
いふ、住む人申さぬ、おめずしとや

まゝなしたは、いけだま見ゆるものにてん。
上にも下つ方には、世に止ばる自由なるのみ
かは、その方も賤しく成りやうをれよん。われ
人の用にまぢなるものは、第一名の蹟なりと
阿るふ女にも見えぬまゝ、あゝ此程古ありたる。
御更和歌は家のものなれば、申すに及ばず
此ども、尋常ふけさく、口香に應じてよみ
あぶら。男も女も、前につけて力持ち心遣ひ
肝あはひ。善き上も善きやうに、新ひまゐ

らせむにより、山鳥の尾の長くしく書きまね
おゝを。なほ重なり、立後ひの敷、申し
あぶら。めでたくかこ。

三月三。 烏丸古細光廣

三條殿小宮お返

二二 獅子が城 その一 近松門左衛門

日本・唐土さまぐに道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の
道、赤壁山の麓にて親子三人巡りあひ、我が聳とばかり聞
き及ぶ吳將軍甘輝が屋形城、獅子が城にぞ着きにける。

徳川時代知名の
浄瑠璃作者。
(三三三—三三六)
支那湖北省武昌
府にあり。
老一官 鄭芝龍。
其の妻田川氏。
其の子和藤内
(鄭成功)。
明の將軍。後、
清に降り、わが
て、又鄭芝龍に
應じて清に叛く。

聞きしに優る要害は、まだ冴えかへる春の夜の霜に閃く軒の瓦、魚虎しちほこ天に鱗ふりて、石壘高く築き上げたり。堀の水藍に似て繩を引くが如く、末は黃河に流れ入り、樓門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧しく、箭窓に石弓隙間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはといは、打ち放さん其の勢、和國に目慣れぬ要害なり。

一官案に相違し、亂世といひ、かゝる厳しき城門。事々しく夜中に殴き、聞きも慣れぬ舅が日本より來りしなどいふとも、誠と思ひ取次ぐ者もあるまじ。假令娘おんなが聞きたりとも、二歳で別れ日本へ渡りし父と、如何なる證據を語るとも、たやすく城中へ入らんこと難かるべし。如何

*老一官先妻の女、
錦祥女。

はせん。」とぞ囁きける。

和藤内聞きもあへず、今更驚くことならず。一身の外味方なしとは日本を出づる時より覺悟のまへ。遂に見ぬ舅よ、聳よと親しみだてして不覺を取らんより、頼まれうか頼まれぬか一口商ひ。否といは、即座の敵。二歳で別れし娘なれば、我等とも行合姉。彼、孝行の心あらば、日本の風も懐かしく、文の便も有るべきに、頼まれぬ心底。我、竹林の虎狩に従へし島夷を軍兵の元手にして、切り靡ける程ならば、五萬や十萬勢の附くは隙いらす。何の人頼み、此の門蹴破り、不孝の姉が首捻ち切り、聳の甘輝と一勝負。」と踊り出づれば、母縋り付き、押止め、其の娘御の心入

れは知らねども、夫につれて世の中の儘にならぬが女の習。父とは親子、御身とは種一つ、他人は自ら一人にて、海山千里を隔てゝも、繼母といふ名は脱れず。娘の心に親兄弟戀ひ慕ふまいものでもなし。其處へ切り込んで、日本の繼母が妬なりと言はれんは、我が恥ばかりか、日本の國の恥。御身不肖の身を以て、韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に返さんと、大義を思ひ立つからは、私の恥を捨て、我が身の無念を堪忍し、人を懷け従へ、一人の雜兵も味方に招き入るゝこそ軍法のもとゝ聞く。まして聶の甘輝は一城



近松門左衛門像
(東京帝國博物館藏)

の主、一方の大將、是を味方と頼むこと、大方にて成るべきか。心を修め案内せよ。」と制すれば、和藤内、門外に大音上げ、吳將軍甘輝公、直談申したき事あり、開門開門。」と毆きは、城中響く許りなり。當番の兵士聲々に、主君甘輝公は、大王の召によりて昨日より出仕有り、いつ御歸りも計られず、御留守といひ、夜中といひ、何者なれば直談とは推參至極、いふ事有らばそれから申せ。御歸りの節披露して取らすべし。」とぞ呼ばはりける。

一官小聲になり、「いや、人傳に申す事ならず、甘輝公の留守ならば、御内室の女性へ直に逢うて申すべし。日本より渡りし者と申せば、合點の有る筈。」と言ひも果てぬに、城中

騒ぎ、我々さへも拜まぬ御臺所、對面せんとは不敬者、殊に日本人とや、油斷すな。」と、高提灯、銅羅鏡はちを打立て、堀の上には數多の兵、鐵砲の筒先揃へ、石火矢はなして打ちみしやげ、火繩よ玉よと轟きける。(國性爺合戦)

二二 獅子が城 その二

近松門左衛門

奥へ斯くとや聞えけん、妻の女房樓門にかけあがり、あ、あ、騒ぐな、騒ぐな。聞き届けて自らがそれよと聲をかくるまで鐵砲放すな、粗忽すな。なうく、門外の人々、吳將軍甘輝が妻錦祥女とは我が事、天下悉く韃靼の大王に靡き、世に従ふ我が夫も大王の幕下に屬し、此の城を預り、守

り嚴しき折も折、夫の留守の女房に逢はんとは心得ず。さりながら日本と有れば懐かし、身の上を語られよ。聞かまほしや。」と云ふ中にも、若しや我が親か、何故尋ね給ふぞと、心もとなさ、あぶなさに、懐かしさも先立ちて、兵ども粗相すな。むざと鐵砲放すな。」と、心遣ひぞ道理なる。一官も始めて見る娘の顔もおほろ月、涙に曇る聲をあげ、「粗忽の申事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍、母は當座に空しくなり、父は逆鱗蒙り、日本へ身退く。其の時は二歳にて親子名残のうき別れ、辨へなくとも乳母が噂、物語にも聞きつらん。我こそは父の鄭芝龍、日本肥前の國平戸の浦に年を経て、今の名は老一官、日本で設けし弟は此の

男、是なるは今の母、ひそかに語り頼みたき事有つて成り果てし此の姿、恥をつゝまず來りしぞ。門を開かせたべかし。」と、染々くどく詞の末、思ひ當りて錦祥女、扱は父かと飛びおりて、縋り附きたや、顔見たや、心は千々に亂るれど、流石一城の主甘輝が妻、下々の見る所、涙をおさへて、「一々覚え有る事ながら、證據なくては胡亂なり。自らが父といふ證據あらは聞かせまほし。」と言ふより、兵口々に、「證據、證據を出せ、出せ。」はて、親子といふより別にかはつた證據もなし。「そりや曲者よ。」と、鐵砲の筒先一度にばらりとつゝ、かくる。

和藤内かけへだて、無用の鐵砲、ぼんともいはせばなで切にしてくれん。「いや、しやつめ共にのがすな。」と火蓋を切つて取圍み、證據、證據と責めかけて既に危く見えけるが、一官兩手を上げて、「あ、あ、これ、證據はそちらに有る筈。一とせ唐土を立退く時、成人の後形見にせよと、我が形を繪に寫し、乳母に預け置きつるが、老の姿はかはるとも、面影殘る繪に合せ、疑をはれ給へ。」なう、其の詞がはや證據。」と、肌に離さぬ姿繪を勾欄に押開き、柄附の鏡取り出し、月にうつろふ父の顔、鏡の面に近々と寫し取つて引きくらべ、引き合せて能く、見れば、繪にとゞめしは古の顔も艶ある緑の鬢、鏡は今の老いやつれ、頭の雪とかはれども、かはらで殘る面影の目元、口元その儘に、我が影にもさも

似たり。父方譲りの額のほくろ、親子の印疑なし。「さては誠の父上かなう懐かしや、戀しや。母は冥途の苔の下、日本とやらんに父上ありとばかりにて、便を聞かんしるべもなく、東のはたと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖を開き、これは唐土、これは日本、父はこゝにましますよと、繪圖では近いやうなれど、三千餘里の彼方とや。此の世の對面思ひ絶え、若しや冥途で逢ふ事もと、死なぬ先から來世を待ち、歎き暮し、泣き明し、二十年の夜晝は、我が身さへつらかりき。よう生きて居て下さつて、父を拜む有り難や。」と聲も惜まぬ嬉し泣き。一官はむせ返り、樓門に縋り付き、見あぐれば見おろして、心

餘りて詞なく、つきぬ涙ぞあはれなる。(國性爺合戦)

二三 朗詠五章

早春

都良香

平安時代の儒者、文章博士。(1061-1136)

氣霽風梳新柳髮、

氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳リ、

氷消浪洗舊苔鬚、

氷消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

納涼

源英明

平安時代の儒者、齊世親王の子。(1100)

池冷水無三伏夏、

池冷カニシテ水ニ三伏ノ夏ナク、

松高風有一聲秋、

松高クシテ風ニ一聲ノ秋アリ。

雪

白樂天

名は居易。唐代の詩人。(769-844)

雪似鵝毛飛散亂、

雪ハ鵝毛ニ似テ飛ンデ散亂シ、

支那唐代の詩人。

人被鶴警立徘徊。

人ハ鶴警ヲ被テ立ツテ徘徊ス。

祝

謝

偃

嘉辰令月歡無極。

嘉辰令月歡極マリ無シ。

萬歲千秋樂未央。

萬歲千秋樂シミ未ダ央ナラズ。

同

慶滋保胤

平安時代の儒者。
(一六五)

長生殿裏春秋富。

長生殿ノ裏ニハ春秋富メリ。

不老門前日月遲。

不老門ノ前ニハ日月遲シ。

二四 詩人菅公

高山樗牛

名は林次郎。
文藝批評家。
文學博士。
(一五三—一五六)
醍醐天皇の御代。
(一五六)

延喜元年二月一日、公京師を發して太宰府に赴く。從ふ

者は、小男と、小女と、味酒安行と名づくる一門生とのみ。

菅公居住の宅。

その子の官にあるもの、處を異にして盡く流竄せられ、その他門下郎等一人も公に伴へるものなし。たゞ勅使藤原眞興等、衛士若干人を率ゐて護送せるのみ。嗚呼、昨は臺閣の寵臣、今は邊陲の遷客、何等の轉變、何等の悲惨ぞや。住み慣れし紅梅殿を出づる時、平生愛せる庭前の梅花を見て悽惻の情に勝へず、一首を詠じて曰く、

みち吹あばにちひれこせよ、梅は花、

あはるじなしとて春を忘るを。

京を離れて後數日、夫人に送れる歌あり、

君がまむ宿れこずるをゆくも、

あくる、までよあへ見しをや。

*河内國南河内郡
道明寺村。

勅使藤原眞興は攝津に於て公に別れ、右衛門少尉善友益友、衛士二人を率ゐ、代つて筑紫に赴く。當時の太政官の官符を見れば、公は殆ど純然たる囚人にして、任中俸を賜



(菅原道真像) 橋本雅邦

あり。蓬萍一たび別るれば、何れの時を期して相會するを得ん。公惜別の情を唱うて曰く、

啼けばこそこかれをいそげ、鶏が音比

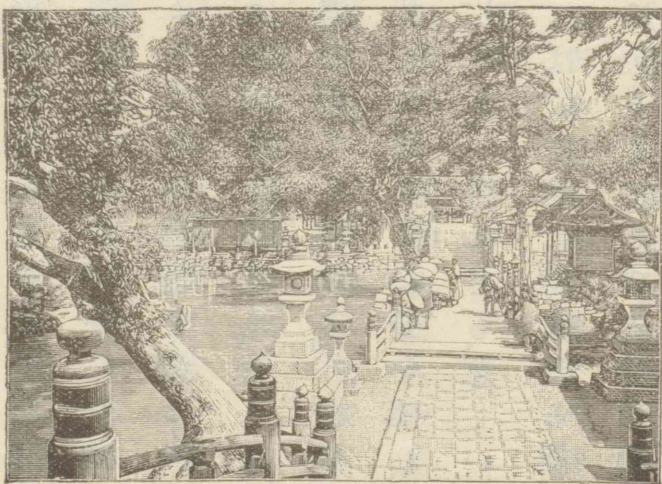
たふえぬせとのゆかつきをがゐ。

播磨の國明石の驛に宿れる
一夜、驛長公を見てその轉變
の甚だしきに驚く。公乃ち
一聯を作りて自ら慰めてい
はく、

驛長莫驚時變改

一榮一落是春秋

*山河遡たり行くに随つて隔
たり、風景黯然として路に在
つて移る。長亭短亭幾たびか公を送迎し、二月三月幾た



伏見府天満宮

*山河遡交隨、行
隔、風景黯然在
路移。(菅原道真)

ひか去來して、公は遂に太宰府の配處に到る。太宰府の配處は、公にとりて絶好の詩境なりき。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や靜かに往時を懷慕し、現境を思料し、咏嘆によりてその哀情を遣るべきなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てし、而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめき。然れども、悲しいかな、かくの如くなるにあらざれば公は遂に詩人たる能はざりしなり。しかも公は死に至るまでこの天分の地に居るを悲しみ、靜かに春秋の榮落を觀じて、何時かは昔日

の榮華に歸るあらん事を望みたりき。この憂愁と希望との現はるゝ所に公の天分は遂に大成せられたり。而して公自らは毫もこれを知らざりしなり。嗚呼、天道の冷酷無情、一に何ぞこゝに至るや。

太宰府における公の詩は甚だ多からず、然れども一言一句と雖も性靈の聲ならざるはなし。文字時に洗鍊ならず、藻思必ずしも巧緻ならずと雖も、眞情常に紙面に汪溢して、公の面目躍如たるを覺ゆ。これを南海の詩に較ぶれば、意更に摯實、情更に痛切、感極まるどころ、往々人をしめて卒讀に堪へざらしむ。詩もこゝに到りては、徒らに技巧のみにあらざるなり。薨ずる時、集めて一卷となし、封

*
仁和元年、公諱
岐守となる。

平安朝時代の儒
文章博士。
(五〇一—五〇二)

緘して紀長谷雄に送る。長谷雄これを見、天を仰いで嘆息せりといふ。今の謂はゆる菅家後草と稱するものこれなり。今左にその數首を摘録せん。

自詠

離家三四月。

落涙百千行。

萬事皆如夢。

時々仰彼蒼。

これ後草卷頭の詩なり。公が昨今の轉變、眞に一夢に較ぶべし。その筑紫に在るや、門を杜ちて一步も外に出でず、都府樓は近しと雖も、纔かに瓦色を望み、觀音寺は遠からずと雖も、たゞ鐘聲を聞くのみ。警吏の門を守るにあらざるも、公自ら檢束して遙かに謹慎の意を致し、なり。

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲。
太宰府址の東二町に在り。今は水城村に屬す。

秋氣漸く催し、旅雁度ること頻なり。憐むべし、公はなほ何時かは京都に還る日あるべきを思量して、一縷の望みを繋ぎしなり。旅雁を見て遙かに情を託す、何ぞそれ悽愴たる。

聞旅雁

我爲遷客汝來賓。

共是蕭々旅漂身。

敲枕思量歸去日。

我知何歲汝迎春。

重陽の佳節は來れり、しかも公はたゞ獨り敗屋の下に愁臥するのみ。遙かに去年今夜清涼に侍せしを憶へば、感慨何ぞ勝へんや。有名なる「九月十日」の絶唱は、實にこの感慨を暢べたるなり。

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持每日拜餘香。

罪無くしてこの流竄に遇へりと雖も、公は一度も君王の不明を恨み、奸臣の讒構を怒りしことあらず、偏に一身の不遇を嘆じて、天命の否塞を悲しみたるのみなりき。唯その身の罪無くして汚名を千歳に遺すは、公の忍ぶ能はざるところなり。故に公の詩、輒もすればこの事に及ぶ。されどかゝる境遇にありてなほ君恩を感謝す、亦以て公の性格の甚だ高くして且美なるを見るべきなり。漢詩の外、公に和歌の詠あり、又以て當時の境遇を想ふべし。その數首を左に録す。

ある夕、をちかたに煙のたつを覽て、

夕せれば野も山にも立つけぶを、

あけきよりおそもぬまさりなき。

雲の浮き漂ふを見て、

山とあれをびゆく雲のあへりくる

あけ見る時ぞ、おちたのまる。

雨のふる日、

あ光のしたあさける程のあけまばや、

著てしぬれぎぬむるよしをかた。

野

つくしよも紫たふる野邊をほきど、

あき名のなしむ人ぞたこぬ。

*太宰府にあり。

延喜三年二月二十五日、公はかくの如き慘憺たる事情の下に病歿せり。時に年五十九。京師を出てしより三箇年餘。その墓所を安樂寺といふ。越えて二年、公の隨臣味酒安行、はじめて神殿を安樂寺に建て、天滿大自在天神と稱せりといふ。かくの如く太宰府の左遷は、啻に公をしてその詩人の天分を全うせしめたるのみならず、その人物の上にも一層の品位を加へしめたりといふべし。(菅公傳)

二五 落花の雪

(一) 右中辨藤原俊基 (一八九三) 後醍醐天皇の正中元年。(一九八)

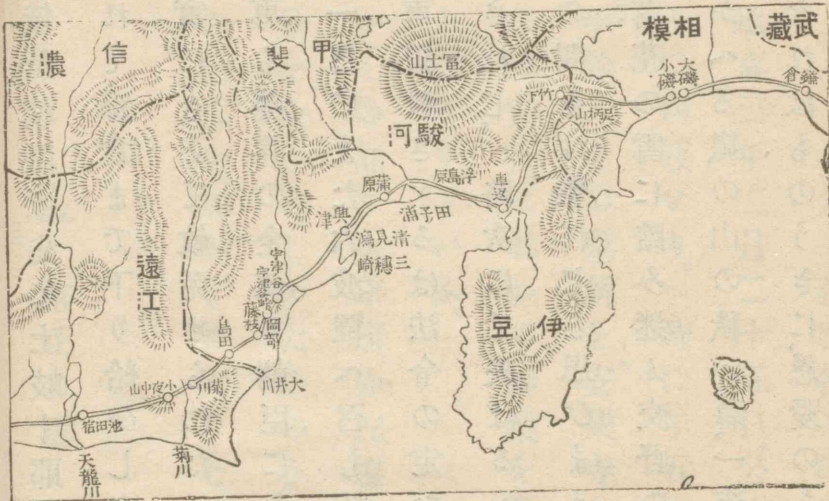
(三) 同天皇の元弘二年。(一九〇)

(四) またや見ん、かた野のみ野の櫻がり、花の雪ちる春のあけぼの (新古今集) (五) 朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦さぬ人ぞなき。(後撰集)

俊基朝臣は先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召し捕らはれて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白状どもに、専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日にまた六波羅へ召し捕らはれて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも赦されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

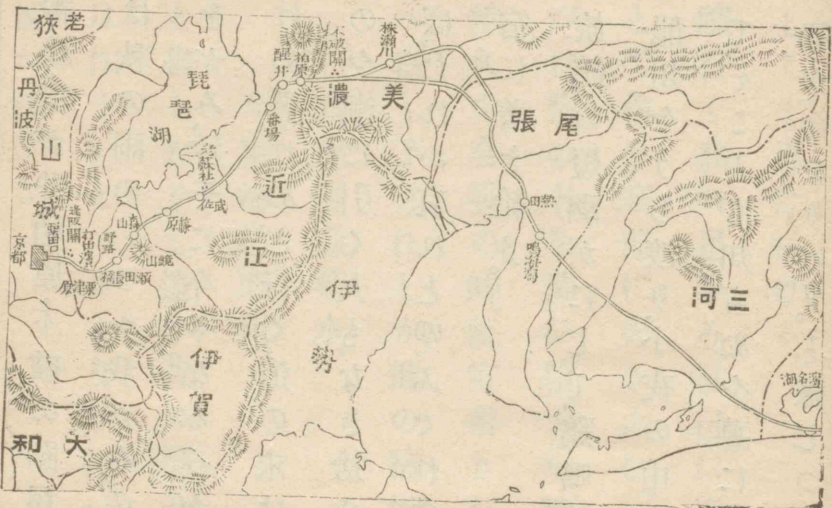
落花の雪に踏み迷ふ交野の春の櫻がり、紅葉の錦を着てかへる嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり淺からぬ我が故郷の妻

*遠坂の關の清水
にかげ見えて今
やひくらん望月
の駒。(拾遺集)



子をば行方も知らず思ひ置
き、年久しくも住み馴れし九
重の帝都をば今を限りと顧
みて、思はぬ旅に出でたまふ
心の中ぞあはれなる。
憂きをばとめぬ逢坂の關の
清水に袖濡れて、末は山路を
打出の濱、沖を遙かに見渡せ
ば、鹽ならぬ海にこがれ行く
身をうき船の浮き沈み、駒も
とらに踏みならず勢多の

(一) 近江より朝立ち
くれば、うれの
野にたづぞ鳴く
なる、明けぬ、こ
の夜は。(古今集)
(二) 白露も時雨もい
たくもる山は、
下葉のこらす色
づきにけり。
(古今集)



長橋打渡り、行きかふ人にあ
ふみちや、世をうねの野に鳴
く鶴も子を思ふかと哀れな
り。時雨もいたくもり山の
木の下露に袖ぬれて、風に露
散る篠原や、篠分くる道を過
ぎ行けば、鏡の山はありとて
も、泪に曇りて見えわかず、物
を思へば夜の間にも、老蘇の
杜の下草に駒を止めて顧み
る故郷を雲や隔つらん。

小夜干鳥、聲こそ近くなるみ湯、かたむく月にしほやみつらん。
(新古今集)

番場醒が井・柏原・不破の關屋は荒れ果て、なほもるものは秋の雨のいつか我がみのをはりなる、熟田の八劍伏しをがみ、汐干に今やなるみがた、かたぶく月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕潮に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、たれか哀れとゆふぐれの晚鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。

年たけてまた越ゆべしとおもひきや、命なりけりさやの中山。
(新古今集)

旅館の燈幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、二度越えしあとまでも、羨ま

しくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日己に亭午にのぼれば、餉進らす程とて輿を庭前に昇き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎に依りて光親卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられしとき、

昔南陽縣菊水、

汲下流而延齡、

今東海道菊川、

宿西岸而終命、

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいと、まさりけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

*南陽縣有甘谷、谷中水甘美、上有大菊、落水上、水從山流下、谷中人家飲此水、上壽百二十、其中百餘歲、七八十者即爲天。
(廣雅)

いにしへもあゝるあめしをたぐ川の

たなじあがきに身をやぶつ免ん。

*駿河なるうつつ
山へのうつつに
も夢にも人にあ
はぬなりけり。
(伊勢物語)

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の
行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷄首の船に乗り、詩歌管絃
の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢と思ひ續けた
まふ。島田・藤枝に懸かりて、岡邊の眞葛裏枯れて、物悲し
き夕暮に宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いとしげりて道
もなし。昔業平の中將の、住む所を覓むとて、東の方に下
るとて、^{*}夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かく
やと思ひ知られたり。
清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守

*富士のれの煙は
なほぞ立ちのぼ
る、上なきもの
はおもひなりけ
り。(古今和歌)

にいと、涙を催され、むかふはいづこみほが崎、興津蒲原
うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、^{*}上
なき思に比べつ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ
行けば、沙干や淺き、船浮きて、おりたつ田子のみづからも、
浮世をめぐる車がへし、竹の下道行きなやむ足柄山の嶺、
より大磯小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎのいそぐ
としもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程
に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。

其の日やがて南條左衛門高直請け取り奉りて、諏訪左衛
門に預けらる。一間なる處に蜘蛛手きびしく結ひておし
籠め奉る有様、只地獄の罪人の十王の廳に渡されて、頸械

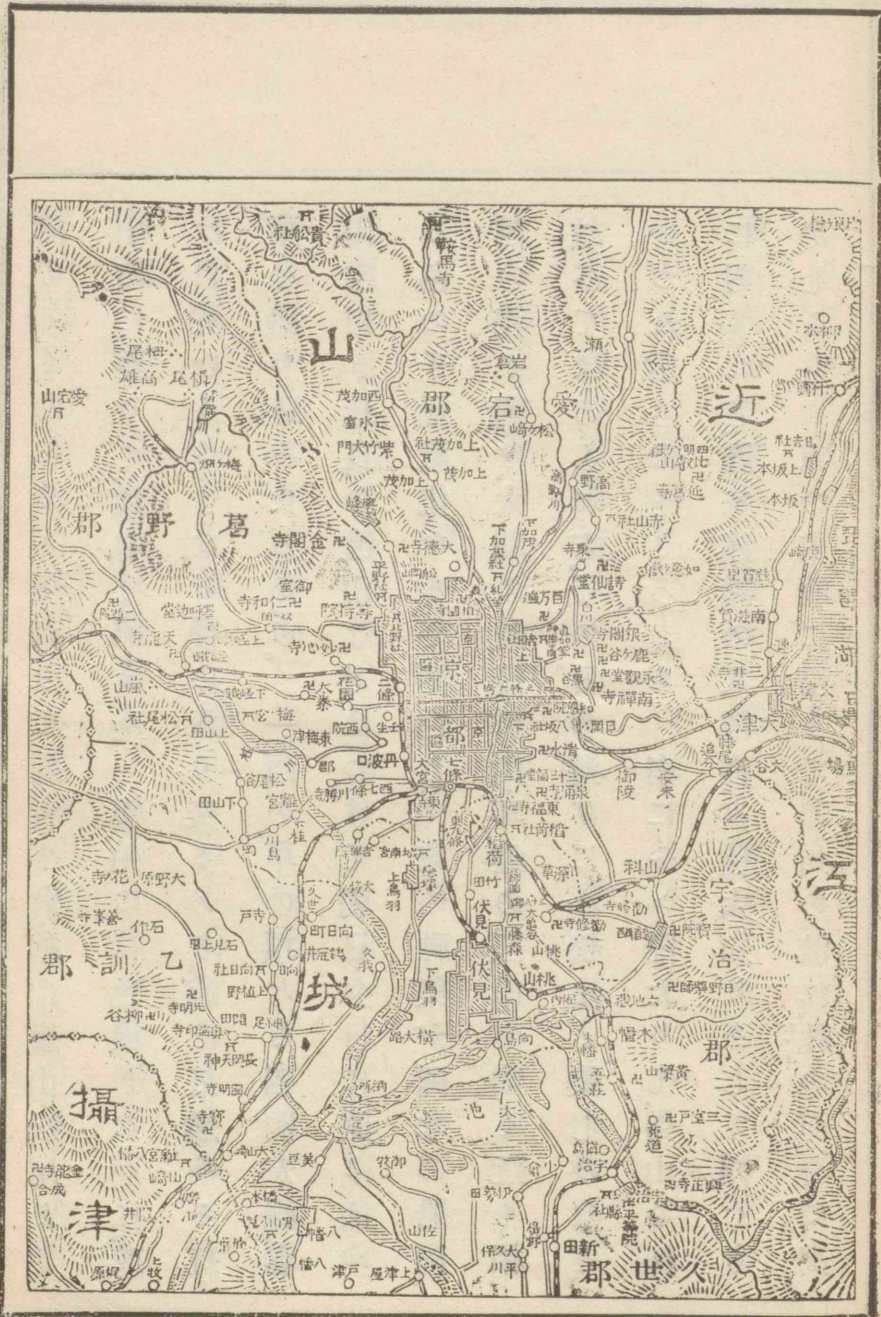
手枷を入れられ、罪の輕重を糺さるゝもかくやと思ひ知られたり。(太平記)

*東京帝國大學文科大學助教授。文學博士。(二三〇—二三〇)

二六 平安京

*藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景行くとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は、日本のすべての景中よりその粹を抜きたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽艶の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰、笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々、波



二六 平安京

濤の如く、西にや、隔たりて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて、地勢は窮まる。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織り込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春尚雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の畝傍香山耳無の三山の如く近く相並びてはあらねど、子の日の遊びに小松曳く樂しみなど、いづれ劣らぬところから。南にや、隔たりて、男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして仰ぐもかしこし。京の東端に沿うて、鴨川の流ながれ、糺たぎの河合に高

野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少しく離れて、桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて琴の音涼しく、また南にむかふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふる材料に乏しといへども、一面よりいへば、山のうちにこもりて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配や、急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來するながめなきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清

けれど、棄てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして清き京都は益、其の清さを加ふるなり。山紫水明の語は、よく京都の景色を表せり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるものなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊に艶やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずして明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、

*
満園着て寝たる
姿や、東山。(三)

見るがうちに重なり／＼て海を覆ふ、波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす、波か、雷か、世界は唯、一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて凄まじかりき。かゝる壯絶の景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ず。されど、下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色の、今も恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に三條の大橋の擬寶珠の、一つ／＼彼方へ彼方へと淡くなりて、向ふに寝たる東山は、未だあるかなきかの夢より覺めず。吉田の岡に竝び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る乙女の姿は隠れて、聲ぞ先づ朝霧を漏れ來る。時雨の景色の、又よその國には見られぬ様よ。

愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と驚きも思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。(國文學全史)

二七 國のしづめ

上田秋成

あはれなる山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。

*徳川時代の國學者。大阪の人。(二五三—二七〇)

(一) 徳川時代の歌人。(二二—二四)

(二) 徳川時代の國學者。(二五三—二七〇)



知不人讀

歌海春田村

あはれなる山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。

歌直枝橘

あはれなる山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帯の平安京の特色なり。

奈^{*}良時代の歌人、
天平頃の人。

○

山^{*}邊 赤人

あまのつちの
かろききびと
駿河なる
あまのぼろ
わたる日の
照る月ね
まらふきも
時じくも

わかまゝし時ゆ
高くたをさき
ふの言も
うらみまば
わがもかろく
光もるま
いゆきけり
雪はふりける

のたりほき
ふきのたりねち

ひんしむゆ

反歌

田子浦ゆちぞ
富士の高嶺ふ雪はふりける

高等女學校用國語讀本 卷八終

明治三十六年十二月十五日發行
 明治三十五年九月二十九日訂正
 明治三十四年二月十一日訂正
 大正元年十月十七日訂正
 大正元年十一月十五日訂正
 大正二年一月十三日訂正
 大正三年二月九日訂正
 大正四年三月九日訂正
 大正五年四月九日訂正
 大正六年五月九日訂正
 大正七年六月九日訂正
 大正八年七月九日訂正
 大正九年八月九日訂正
 大正十年九月九日訂正
 大正十一年十月九日訂正
 大正十二年十一月九日訂正
 大正十三年十二月九日訂正
 大正十四年一月九日訂正
 大正十五年二月九日訂正
 大正十六年三月九日訂正
 大正十七年四月九日訂正
 大正十八年五月九日訂正
 大正十九年六月九日訂正
 大正二十年七月九日訂正
 大正二十一年八月九日訂正
 大正二十二年九月九日訂正
 大正二十三年十月九日訂正
 大正二十四年十一月九日訂正
 大正二十五年十二月九日訂正
 大正二十六年一月九日訂正
 大正二十七年二月九日訂正
 大正二十八年三月九日訂正
 大正二十九年四月九日訂正
 大正三十年五月九日訂正
 大正三十一年六月九日訂正
 大正三十二年七月九日訂正
 大正三十三年八月九日訂正
 大正三十四年九月九日訂正
 大正三十五年十月九日訂正
 大正三十六年十一月九日訂正
 大正三十七年十二月九日訂正
 大正三十八年一月九日訂正
 大正三十九年二月九日訂正
 大正四十年三月九日訂正
 大正四十一年四月九日訂正
 大正四十二年五月九日訂正
 大正四十三年六月九日訂正
 大正四十四年七月九日訂正
 大正四十五年八月九日訂正
 大正四十六年九月九日訂正
 大正四十七年十月九日訂正
 大正四十八年十一月九日訂正
 大正四十九年十二月九日訂正
 大正五十年一月九日訂正
 大正五十一年二月九日訂正
 大正五十二年三月九日訂正
 大正五十三年四月九日訂正
 大正五十四年五月九日訂正
 大正五十五年六月九日訂正
 大正五十六年七月九日訂正
 大正五十七年八月九日訂正
 大正五十八年九月九日訂正
 大正五十九年十月九日訂正
 大正六十年十一月九日訂正
 大正六十一年十二月九日訂正
 大正六十二年一月九日訂正
 大正六十三年二月九日訂正
 大正六十三年三月九日訂正
 大正六十三年四月九日訂正
 大正六十三年五月九日訂正
 大正六十三年六月九日訂正
 大正六十三年七月九日訂正
 大正六十三年八月九日訂正
 大正六十三年九月九日訂正
 大正六十三年十月九日訂正
 大正六十三年十一月九日訂正
 大正六十三年十二月九日訂正

大正十三年二月七日發行
 大正十二年十一月三日發行
 大正十一年十月七日發行
 大正十年九月九日發行
 大正九年八月九日發行
 大正八年七月九日發行
 大正七年六月九日發行
 大正六年五月九日發行
 大正五年四月九日發行
 大正四年三月九日發行
 大正三年二月九日發行
 大正二年一月九日發行
 大正元年十月九日發行

定價	
卷一	金卅六錢
卷二	金卅五錢
卷三	金卅四錢
卷四	金卅三錢
卷五	金卅二錢
卷六	金卅一錢
卷七	金卅錢
卷八	金廿九錢
卷九	金廿八錢
卷十	金廿七錢
卷十一	金廿六錢
卷十二	金廿五錢
卷十三	金廿四錢
卷十四	金廿三錢
卷十五	金廿二錢
卷十六	金廿一錢
卷十七	金廿錢
卷十八	金十九錢
卷十九	金十八錢
卷二十	金十七錢
卷二十一	金十六錢
卷二十二	金十五錢
卷二十三	金十四錢
卷二十四	金十三錢
卷二十五	金十二錢
卷二十六	金十一錢
卷二十七	金十錢
卷二十八	金九錢
卷二十九	金八錢
卷三十	金七錢
卷三十一	金六錢
卷三十二	金五錢
卷三十三	金四錢
卷三十四	金三錢
卷三十五	金二錢
卷三十六	金一錢
卷三十七	金
卷三十八	金
卷三十九	金
卷四十	金
卷四十一	金
卷四十二	金
卷四十三	金
卷四十四	金
卷四十五	金
卷四十六	金
卷四十七	金
卷四十八	金
卷四十九	金
卷五十	金

十版國語讀本與附



著者 元元堂書房編纂所
 發行所 瀨川光行社
 印刷者 猪木卓二

發兌 元元堂書房

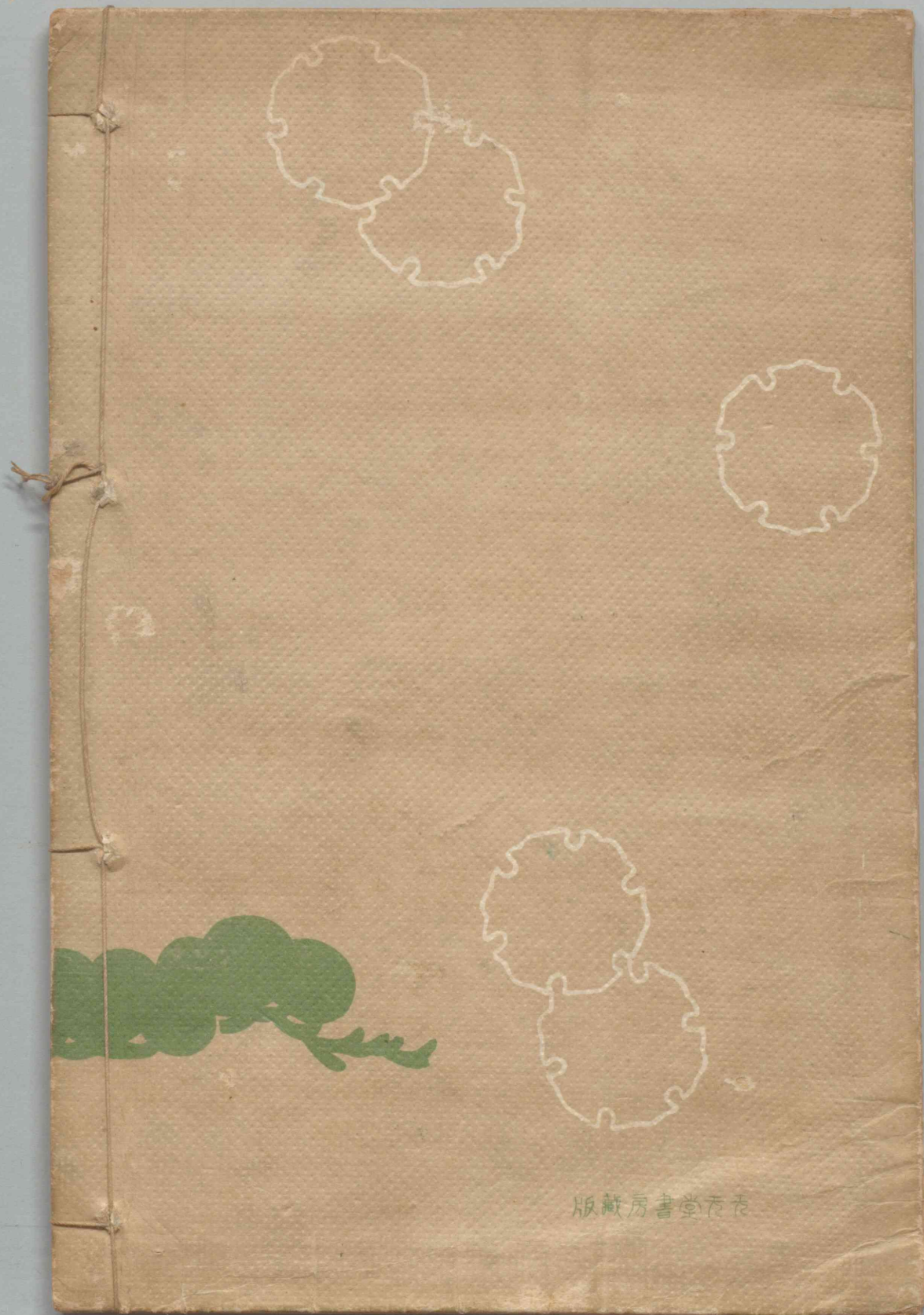
大賣所 北隆館
 大賣所 盛文館

弊書房出版圖書に
 心切に相成りて
 出品せらるる御
 業上之御被下候
 合致候御座り候
 本御注文被下候
 間直に發送仕候

東京市四谷區花園町五十三番地
 電話替牛込五七八〇番
 振替東京五七八〇番
 東京市橋元數寄屋町三丁目七番地

大阪市西區靱北通二丁目十番地

東京華行社印刷



版藏房書堂夜夜